



# NEWSLETTER

## 保育・子育て総合研究機構だより

2013.7.1 発行 NO.28

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

## 特別企画 保育のグランドデザイン…序にかえて Part 2

前号(No.27)では、グランドデザインの1つのイメージとして、個々の子どもの「差異」(ちがひ)や「逸脱」(はみだし)を面白いと感じられるような保育者(保育園)になること。そのために、子どもの思いや学びについて、大人たちが「語り合う日常」が不可欠であるという提案がありました。

これは、実践する側において、日頃の保育や園生活のありようを見直す好機になる可能性があります。ただ単に「この子に社会性が身につくためには…」と話し合うのではなく、「今、この子は何を学んでいるのだろう」という語り合い。そこが基本で、子どもを洞察する保育者の力量が求められます。

今号では、前号の続きとして、「子ども」を語る切り口を中心に対談をすすめていただきます。

■出席者(以下、敬称略)

森 眞理 ●立教女学院短期大学准教授

久保健太 ●篠原学園専門学校こども保育学科学科長

### 保育者たちが大切にしていること

久保 ●これからの保育として、その子その子の学びをしっかりと見ようとするなら、私は人数規模が大事だと思っているんです。適切な規模であれば、気づけるものが、一人でたくさんの子どものを見ると、気づけなくなるでしょう。

森 ●グランドデザインを描こうとする時、イタリアのレッジョ・エミリアをはじめ、世界の保育に目を向けることから示唆を受けることがあります。たとえば、保育者の配置人数の点でいうと、多くの先進諸国といわれている国では、4～5歳児が1クラス15名で2人、レッジョの幼児学校(3～5歳児)でも25人で2人の保育者がクラスに常駐していて、しかも、年間のインターンがいたりします。人的配置に力を入れないと子どもも大人も育たない、ということです。

久保 ●ただ単に保育士の数を増やせば良いというもの

ではなくて、子どもの学びを観察する。そのための人員が必要ですね、それにインターン(実習)が年単位で行われるというのも大事なことです。これは、保育者養成校のカリキュラムのあり方が問われます。日本ではせいぜい2、3週間ですが、短すぎます。もっと長い期間が必要ですね。

森 ●私が実際、アメリカのプリスクール・キンダーガートンで教育実習をした時は、春学期1期の5か月間(1～5月まで)でした。週最低3日間、午前中に実習を行い、午後から授業でした。それくらいすると子どもの育ちのプロセスを話せますし、友人からも具体的にいろいろな意見をもらえるのです。

グランドデザインを考える上で、保育者養成や現職者研修のこと、人的環境も考えて、子ども理解を深めていくための手法も考えていかなければいけないのでは、と思います。イギリスでも今、「ラーニングダイアリー(学びの日記)」という形で、子どもがつぶやいたことや「面白いなあ」ということを気づいた先生が付箋に書いて、子どものポートフォリオに貼っていく。気づいた人が誰でも貼るのです。担任の先生がそれを読んで、保育者全員で子どもの様子を見られるように、語れるようにしています。ところが、日本の多くの保育現場では、保育を描くことや子どもの姿を表すことがスナップショットになっているのではないかなと思うんです。

久保 ●ある一部の場面やできたことなどの能力を撮って、貼り出したりしますね。

森 ●確かにそうですね。できたことじゃなくて、子どもが何をして、面白かったのか、大変だったのか、そのプロセスが語られないとね。

久保 ●そういう意味では、グランドデザインを描こうとする時、語り合うメンバーに子どもが入っていないのも問題ですね。レッジョ・エミリアでは、語り合い

がされる時は子どもと語り合っているし、子どもは大人のように語れないので、子どもなりの表現の仕方  
で参画している。私自身の体験では、子どもの権利や  
子どもの参画を訴えると、「子どものわがままを認め  
るのか」という反論を受けるのですが…。

森●今年の3月にレジヨを訪問した時、4歳児の女  
の子が絵を描いていたんです。1つのテーブルで2人  
は粘土をしており、2人は絵を描いていた。そこに先  
生（保育者かも？）が1人座っていらした。子どもが、  
自分が描いた女の子の絵をその先生に見せたら、先生  
は即言葉を返さず、同じテーブルの子どもに感想を聞  
いたのですね。

聞かれたある1人の男児が、「変だ（キライ）！」  
といったんです。それに対して先生は、淡々と「なぜ  
そう思うの」と聞き返しました。すると男児は、「口  
が大きいから」と。そこで先生は、「そんなこといわ  
ないの」と男児に返すのではなくて、その回答を、絵  
を描いた子に伝えたんです。すると、女児は「楽しい  
から口が大きいの」と答えたんです。そうしたら、感  
想をいった男児は「その割には目が小さい」と。

どんどん広がっていくんですね。そして、女児はも  
う1枚、ちょっと違うように絵を描こうということに  
なる。必ず、先生が一方的に評価するのではなく、そ  
こに子どもが本当に参画した対話になっているのです。

久保●公共の場をつくっているように感じますね。子  
どもたちが参画して公共の場をつくっているような気  
がします。

森●はい。ひらかれている感じがしましたね。回答さ  
れた女児は、男児に非難されたとか、否定されたと受  
けとめないで、面白くするにはどうすればよいか考え  
るんですね。

久保●「子どもの一人称を大事にしよう」という話を  
前回でしましたが、こういう意味なんだなと感じまし  
た。一人称を大事にするというのは、「肯定する」と  
いうことではないんですね。「否定される」「反論され  
る」ということも含めて、ちゃんと、聞いてもらって  
いるというか、ちゃんと扱ってもらえているというか、  
そういうことなんですね。

## ファンタジーは容赦のない「語り」

森●前回で話したファンタジーにしても、レジヨの

幼児学校を訪れた時、女の子が木の幹で光のテーブル  
になっていると、そこにメガネのレンズやビー玉など  
を並べて遊んでいました。「何をしているの？」と先  
生が尋ねると、「妖精が来るので、そのための用意を  
しているんだ」と物語る。先生がまた「いつ来るの？」  
と聞くと、「夜中に来る」という。「でも、その時間は  
寝ているんじゃない？」とさらに聞くと、「でも、羽  
が残っているから大丈夫（わかるの）」という。

そうしたやりとり、他でも子どもがファンタジーの  
物語を語っているのを聞きました。語りがいろいろな  
ところで起きています。

久保●ファンタジーを大事にするとは、そういうこと  
なんですね

森●先ほどの絵に対して「変（キライ）」といった子は、  
きちんとその女の子の活動をもっと面白く、素敵にし  
ようと引き受けて参与しているわけです。それはケア  
（Care）というとらえ方でもあるのです。

さらに、もっと面白くするためにはどうしたらよい  
か、その次の面白さへの提案をしているんです。目は  
どうしたらいいかなと考えるし、次の世界に旅立って  
いくんです。

久保●ファンタジーを大事にするという点で、非常に  
参考になります。先ほどの切り株の話での、「これ  
何？」「妖精が来るの」「いつ来るの？」「夜」というや  
りとり。それにつづく「寝ているんじゃない？」とい  
うこの言葉。この（興ざめさせるような）現実的な言  
葉は「ファンタジーを大事にする」上で、タブー視さ  
れているように思います。けれど「寝ているじゃない  
？」と聞くと、「羽根が残ってたの」と続く。必ず  
しもファンタジーの世界にどっぷりつき合わなくても  
いいんですね。「すてきね」で終わらなくてもいいん  
ですね。

森●多くの保育現場では（日本に限ったことではあり  
ませんが）、子どもの声という表現を聴き取り、語り  
合ったり、分かち合ったりするという前に、「これは  
○○」と結論づけて終わってしまっているのではない  
でしょうか。ゆえに、スナップショット的にその場そ  
の場のみでいかに対処するか、が優先されてしまうの  
ではないでしょうか。

久保●質問することは必ずしも否定することではなく、  
あなたにかかわっているんですよ、あなたをケアして  
いるんですよ、というメッセージを含んでいる。

私は自分の授業で学生たちに「対話」というか、聞き合い・聴き合いをしてもらうことがあるのですが、質問をされると「あなたのいっていることはおかしいですよ」といわれているように感じてしまう学生がいます。質問する側のいい方にも問題はあるのですが、否定されていると受け取ってしまうことがある。

でも、レッジョの話の聞いていると、質問することは、否定することではなく、相手への関心を示すことなんだと、あらためて感じます。

森●それがアイケア（I care：私はあなたに心を砕いていますよ／引き受けますよ）なんです。

そのことは、絵本『フレデリック』（作・絵：レオ・レオニ／訳：谷川俊太郎／好学社）の世界の話に描かれているように思います。

フレデリック以外のネズミは冬支度のために餌を集めているのに、フレデリックは言葉を集めているという。「変だな」と思いつつも、まわりのネズミたちはフレデリックを受け入れている。冬になって餌がなくなって寒くなったら、どうして、言葉を集めたり色を集めたりしていたのかと、ネズミがフレデリックに聞くと、ここぞとばかりに詩を語る。「君は詩人だね」とネズミがいうと、フレデリックは少し赤くなるという話。私は、そこに保育があるように思う。

「異質なものは異質として、ともに育っていくことが保育」だと津守真先生（お茶の水女子大学名誉教授）はおっしゃっているけれど、まさに本質は、そこだと思ふんです。

久保●「君は詩人だね」というセリフがいいですね

森●ポエティック（詩的）な世界を子ども時代にどれだけ広げていけるかが大切、とローリス・マラグツィ（レッジョ・エミリアの保育実践創始者）もジャンニ・ロダーリ（イタリアの作家・児童文学作家）も話しています。それが心の糧になると。子どもは自分の世界があるということを感じられるようになって思ふんです。石井桃子さん（児童文学作家・翻訳家）もおっしゃっていた。

久保●松岡享子さん（翻訳家・児童文学研究者）の著書に『サンタクロースの部屋』（こぐま社）という本があります。子どもは、目に見えないものを心に住まわせている。大人になったら、それが嘘だとかわかるかもしれないが、それを豊かに膨らませておくと目に見えないものに対する感受性は残る。子どもの頃にサ

ンタクロースを住まわせていたところが、目に見えないものが住み込む場所として残るといような意味の文章で、ファンタジーやポエティックな世界を大事にされてきた子どもは、他人の痛みだとか目に見えないものに感応することができるといった内容でした。それを思い出しました。

## 語り合い＝聴き合い それが真に知り合うことに

森●レッジョ・エミリアは、アトリエやプロジェクトなどが先行して注目されてしまっているようですが、歴史と文化の中にあるもので特別に何かしようという思いではないと思う。レッジョの方たちが語る「良く生きることを大切にしている」ということは、「good」（良し悪し）ではなく「well」（人間の善性）というのが思想にあると思いますね。

久保●「well」という言葉は、何をするかは問わない、つまり、多様性の思想も含まれていると思いますね。「良く」やるのであれば、絵を描くでもいい、虫を採るでもいい。

森●そこには、保育者の一人称もきちんとあるわけです。

レッジョ・エミリアの幼児学校には、アトリエリスタが常駐しているのですが、アトリエリスタは、一人ひとり幼児学校のアトリエで自分の世界を描くんですよ。たとえば、織物が好きなアトリエリスタは織物の世界なんです。ただそこで、アトリエリストはどういう人なんですかと尋ねた時に、「まず、教師であること」ということでした。

日本人の感覚では、教師というと教え込むと考えられますが、そうではなく、彼らにとって教師とは、聴く人なんです。子どものことをとことん聴ける人です。アトリエリスタが芸術の専門として来た時に、スキルやテクニックを伝えたくりますが、一方的ではなく、まず子どもに聴くことから始めるんです。それが教師であるということを知っているんです。

久保●聴くということも、かなり専門的な技術が必要ですね。

森●子どもの声もそうですが、子どもの表情も聞いているところ。とても面白いなあと感じました。織物を見ても、織ってみたいと思う子もいるだろうし、絵を描いてみたいと思う子もいるだろうし。

久保●一人ひとりの声を聴くとすると、ゆったりとすごすことになりますよね。それこそ30人一斉にということではなく、4人ぐらいでアトリエリスタ1人のような。私が教育学を勉強し始めた15年ほど前には、カウンセリングの思想が、教育学にもすでに入ってきていました。しかし、中には二項図式的に、「話すクライアント」と「聴くカウンセラー」といった図式を探るものもありました。そうすると、話す人と聴く人が交替しない。「対話」にはならない。加えて、カウンセラーの自己抑制が大きくなってしまいます。

聴く側が抑制してまで「聴く」ことをする場面が必要なのはわかりますが、アトリエリスタはそうではないですよね。

森●そうですね。いろいろとコメントをしていきますね。

でも今、社会の中で、聴くことも崩れてきているような気がしますね。目上の方たちも語っていないように思うことがあります。忙しい、忙しい、で自分語りが少なくなっているのではないのでしょうか。

口承文化、伝承文化などが崩れている気がすると思います。もちろん文化は変容しますが、語りづがれているものを聴いて、咀嚼して、いろいろな世界を広げていき、また新たな世界を構築したり、積み重ねたりしていくのが保育の場のような気がします。

久保●「子どもと文学」という授業では、柳田國男が遺してくれた昔話を題材にしています。そうすると、「なぜ、猿の尻尾が短いか？」という話が載っている。読んでいくと、「それは、熊に騙されたからだ」と書いてある。昔の子どもたちは、犬を見て、猫を見て、狐を見て、牛を見て、猿を見る。そうすると、猿だけ尻尾が短い。不思議になって、おばあちゃんに「なんで、猿だけ尻尾が短いんじゃ」と訊く。すると、おばあちゃんが囲炉裏を囲みながら、「昔はな、猿の尻尾は三十三尋<sup>ひろ</sup>あったんじゃ」と話し始める。

これは口承文化であり、かつファンタジーであり、さらには世代間でのファンタジーの共有であり、素敵だと思ったので、学生に「カラスはなぜ黒いのか」と質問すると、学生はそれぞれファンタジーを書いていく。文学について知ること大事だけど、ファンタジーの世界を膨らませておくことも保育者にとって大事だと思って、そういった授業もしているんです。

そういう意味では、人々が“語り合う場”そのもの

を増やさなくてはいけないと感じました。グランドデザインをデザインする際にも、語り合いの中からデザインが生まれてくるのがいいですね。その際は、関心を持ち合って、質問をし合って、そして、聴き合うのが大事だと思いました。時には「否定」も含む。そうした営みが、子どもを大切にすることなのだということを、この対談から教わりました。

森●グランドデザインを描く際に、一人ひとりの子に「私は、あなたのことを知りたいのです」ということから始めたいなあと思いますね。

## 編集後記

### ◎語り合いを語り合うことから

グランドデザインをイメージした対談は、まずは、保育者どうして「子ども」について語り合うことから。そして、子どもと保育者の語り合い、さらに子どもどうしも語り合う。そんな語り合いを、園生活の基本にしてはどうかと提言されたように思います。

語り合いの中には、当然、ファンタジーの世界も入り込めます。文中、下線部分は日本人の気質として、子どもの“ゆめ”を壊しかねない感じがして馴染みづらいかもかもしれません。しかし、語り合うとは、子どもを子ども扱いしないで人として尊重する、それは時として“厳しさ”を伴う。だから、ファンタジーは豊かな語り合いになる、と示唆されています。『モモ』や『はてしない物語』（ともに、岩波書店）の著者ミヒャエル・エンデも、人間にとってファンタジーの大切さを説いています。

今、制度改革論議と並行して「保育の質の向上」「保育者の資質向上」が求められています。けれども、「保育の質って何ですか」と世間から問われると急に曖昧世界に入ります。研修といえば、良い講演を拝聴するイメージが強く、「研修を“受ける”」といます。しかし、どんな論客より、日々、子どもと接している私たちは、今この瞬間を生きている子どもの学びの姿やすばらしさを、社会に向かって発信する伝え手になりえるのです。

子どもを“語り”、仲間の語りを“聴く”、そんな「語り合いの習慣」こそは、最高級の園内研修であり、保育園（保育者）のルーティンワークに引き上げることで、グランドデザインの素描が始まる、そんなとらえ方もできと思いますが、いかがでしょう。

当研究機構では、来年1月開催の保育総合研修会で、「わくワークシート」(No. 1～3刊行)を活用した園内研修をテーマに分科会を企画しています。子どもと保育を園内で語り合うための研修です。前回と今回、2回にわたっての対談が、子どもを語る園内研修につながる“好機”になるよう、分科会案内をさせていただいた“後記”でした。

(片山喜章●神戸市・はっと保育園園長)

### ◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟  
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会  
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10  
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879  
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>  
E-mail [ans@zenshihoren.or.jp](mailto:ans@zenshihoren.or.jp)